＜卒業論文概要＞

異性愛規範の撹乱
—ゲイ・アイデンティティのゆらぎに関する考察—

佐々木　美佳*

１．本研究の目的

ジェンダー研究やフェミニズム研究、ゲイスタディーズは異性愛規範に対して問題提起を行い、その自明性を論理的に切り崩してきた。しかしながら男女差別、同性愛者差別は一向に消えて無くなる気配がない。研究の蓄積によりその恣意性が暴かれたのにかかわらず、既存の規範は維持され、それに基づく差別が行われ続けるのはなぜであろうか。啓蒙活動が行き届いていない結果として人権意識が確立されないことに、継続される差別の原因を還元することができるのだろうか。筆者はそうではないと考える。

同性愛者差別に的をしぼり、異性愛と同性愛（非異性愛）という二元論のみで問題を捉えることの限界／「性の多様性を認めよう」という言説に潜む弱者と強者の設定／ある規範の恣意性が暴かれた後でオルタナティヴを提示することの困難さの三点を、現在わたしたちが対峙している課題として示した。本研究は、上記の三点の課題を解くための方策を探ることを目的としている。

２．構成

序章
第１章　「男」と「女」に期待されるふるまい
　第１節　異性愛規範の合理性
　第２節　「自然」の虚構性
　第３節　パフォーマティヴティ：一貫性の転覆
第２章　「ゲイ」に期待されるふるまい
　第１節　同性愛者の誕生
　第２節　「ゲイ」というフィクションのゆらぎ
第３章　ゲイ男性の実践：インタビュー分析
　第１節　演じる者同士の斟酌

* 筑波大学人間学群教育学類４年

第２節　出会いのテクノロジー
第３節　友情と愛情の葛藤
第４節　「模範」との比較
終章　本研究のまとめ

３．概要

第１章の第２節及び第３節では、バトラー(1999)の先行研究に依拠しながら、前言説的な領域に配置されたセックス（語られる「自然」）もまたジェンダー（社会的概念）であると指摘し、規範を反復的にふるまうことで個人が構成されていくことを、「パフォーマティヴティ」を通して考察した。また、非異性愛者の周縁性を称揚しながら中心に位置する異性愛規範に疑問を投げかけるクィア研究について紹介した。

第２章の第１節では、同性愛行為が個人の内面に深く埋め込まれ、同性愛者が成立するまでの過程を概観した。第２節ではゲイ男性がゲイコミュニティ内部に対して感じる「ついていけなさ」について論じている森山(2012)の先行研究に依拠しながら、ゲイ・アイデンティティのゆらぎについて考察した。

第３章では、ゲイ男性３名に対するインタビューデータに基づき分析を行った。第４節ではゲイ男性の発言の中で使用される「ノンケ（異性愛者）と変わらない自然な出会い方」「本能」「普通」という表現に着目した。模倣すべき正常、参照すべきモデルを本研究では「模範」と定義した。複数の規範から「模範」は構成されるが、その際、規範は個人に合わせて変形されるため、規範の受容と抵抗は同時に起こり得ると分析した。「模範」の内実は個人によって異なるので、二元論には回収できない。

終章では、異性愛体制に非異性愛者を同化させる試みに潜む、寛容という差別形態について言及した。また、恣意性によってのみ既存の規範を否定すれば、新たな代替案は絶対的でなくてはならないが、そのようなものを提示することはできないため、丁寧な事実認識に基づいた、より良い代替案を求め続ける他ないと述べた。既存の規範の流用可能性はすなわち、規範の可変性を示すものとして捉えられる。ゲイ男性による異性愛規範の流用は、性別に基づく二元論を突き崩し、異性愛規範撹乱の契機となり得ると主張し、本研究の結論とした。

４．主要参考文献

ジュディス・バトラー1990＝1999 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社
森山至貴 2012『「ゲイコミュニティ」の社会学』勁草書房